

その 25

万葉ファンタジア

「痩せたる人を嗤笑ふ歌」



痩せたる人を嗤笑(わら)ふ歌二首

石麻呂尔 吾物申 夏瘦尔 吉跡云物曾 武奈伎取喫

「石(いは)麻呂に 我物申す 夏瘦せに 良しといふものそ 鰻(むなぎ)捕り喫(め)せ」

(石麻呂さんに謹んで申し上げます。夏瘦せによく効くそうです。鰻を捕って喫しあがれ)

大伴家持(巻 16・3853)

瘦々母 生有者将在乎 波多也波多 武奈伎乎漁取跡 河尔流勿

「瘦(や)す瘦すも 生ければあらむを はたやはた 鰻を取ると 川に流るな」

(瘦せながらも生きていられたら結構でしょうに。もしかして、鰻を捕ろうとして川に流れなざるな)

大伴家持(巻 16・3854)

右、吉田連老(むらじおゆ)、字(あざな)は石麻呂といふ。所謂(いはゆる)仁敬(にんきょう)の子なり。その老、人となりて、身体(み)甚(いた)く瘦せたり。多く喫ひ飲めども、形(かたち)飢饉に似たり。此に因りて大伴宿祢家持、聊(いささ)かにこの歌を作りて、戯れ笑を為(な)せり

前回、軍歌「海ゆかば」を作曲した信時潔は、万葉集の歌から 10 曲以上作曲していることを紹介した。その中には、「海ゆかば」の他に、大伴家持の「瘦人を嗤う歌」があるが、「海ゆかば」とは対照的に、ムナギをネタに友人をからかう「瘦人を嗤う歌」は、家持のユーモアセンスを窺わせてなんとも愉快である。

私たちも、2019 年 3 月、鳥取県民会館で上演した音楽朗読劇「愛のもののふ大伴家持」の舞台で、この「瘦人を嗤う歌」を取り上げた。この舞台は、語り手の言霊の精霊を、当代一の人気女流浪曲師玉川奈々福さん、そして、音楽の楽の精霊を、世界のロック界でその名を知られる天才的なギタリスト山本恭司さんという異色のプロを起用、新しい万葉の舞台を制作した。そしてこの「瘦人を嗤う歌」は、それまでの朗読劇が一転して、語り手の言霊の精霊は、万葉衣装を脱ぎ捨て立ち上がると、色紋付に袴の浪曲師となり、一方楽の精霊は、三味線代わりにロックギターによる曲師になり替わり様々な音色を奏でて、奈々福さんの唸りと丁々発止の掛け合いをする、いわば、ハイパー浪曲に一変する……今回の万葉ファンタジアは、筆者と演出の山崎清介氏が共同執筆した脚本をもとに、万葉集にナンセンスをテーマにした歌を取り込んだ家持のユーモアセンスに倣って、聊かナンセンスな外連(けれん)に仕立てたもの。しばし、お楽しみを！



万葉集の中で、家持が詠った歌は、春夏秋冬の季節を詠った歌、祝いの歌、離別、悲傷、防人の歌など多種多様、様々な歌がございます。その中でもこの「痩せたる人を嗤笑ふ歌」などは、まるで噺家の小噺です。

この歌に登場する家持さんのお友だち、こと、あざ名が石（いは）麻呂さん。なにやら名医の息子らしいのですが、その名と見かけは大違い、木の枝のようにいたく痩せておりました。そんな身体をからかってつけたのか、それとも、見かけによらず岩のように頑固で堅物だからつけられたあざ名か。この二人、お互い気安くあだ名で呼び合う仲。それも何やら怪しいあだ名を使い分けて、互いをからかったり、すかしたり、笑ったり。（ワッハハ）
（以下、（ ）内は、ヘビメタ・ギターが笑い、語り、奏でる音）



さて、この愉快的な痩せたる人を嗤う「ムナギの歌」、私、浪曲師玉川奈々福が吟じましたならば、どうなるのかと申しますと……

（ドンドン）

「ごめんください、イワ麻呂先生！おられるかい、イワさん先生」
「誰だよ、ったく、今日は休診日だっていうのに」（ガラガラガラ）
「オラ、オラ、おられたか、イワさん、いんや、イヤさん先生よ」
「オヤ、オヤ、ヤカモチさん、いんや、ヤキモチさん。オレア、先生じゃねえ。そりゃ、親父だい。で、どうした、具合でも悪いんかい？」
「イヤイヤ、具合悪かったら、ここには参らぬ。イヤちゃん先生の具合を良くしてあげようって、もの申しにやって来たのじゃ」
「具合を良くするって？ そいつはちょうどいいとこに来てくれた、ヤキモチさんよ。この立てつけの具合が悪いから直してってくれ」
「立てつけ……やすやすもお安い御用。それがしの立てつけは、



もういつも朝から晩までピンピンじゃ」(ピンピン)

「そりゃあ、またけっこう。色男は身も身体もピンピンでなきゃあな」

「それを言うなら、身も心も、でござろうが、イヤちゃん先生」

「イヤちゃんはともかく、先生はやめてくんな、ヤキモチ先生よ。それで、今日は何の用だい？」

「今日は、イヤちゃんに、イイこと申し上げようと思って」

「イイことってなんだよ？いいカミさんでも紹介してくれるのかい」

「アア、やっぱりカミさん、ほしいのかい？」(カミ、カミ)

「ほしくない……わけじゃないけど」

「それだったら、余計に、じゃ、その身体つきをなんとかしなくては」

「オレの身体つきがどうしたってんだい？ヤキモチ先生よ」

「痩せすぎじゃ。飢饉にでもあったみたいで、どっから見ても、骨と皮、まるで、ムナギの骨川筋衛門ではないかい」

「ムナゲ？オレの名は、ムナゲの骨や皮のようなヤワではなく、イワ麻呂、てんだ」(ヤワ、ヤワ)

「ヤワちゃんよ、ムナギのホネ川筋衛門では、女人にはもてぬぞ」

「イヤイヤ、細マッチョのホソ川イワ麻呂と言われて、女子にモテモテよ」(マッチョ、マッチョ、モテモテ)

「どこがマッチョか、ヤワちゃんよ？それでは、女子どころか、患者も寄りつかぬぞ」

「いんや、そう言えば、最近、親父の薬師(くすし)に来る客が、オレの身体見て、客足が減ってんだよ」

「客？客足？」

「あ、いけねえ、客じゃねえや、患者、患者さん」

「はたやはた、そこで今日は、ヤワちゃんに身体にいい食べ物の話を持って参ったというわけじゃ」

「で、なんだい、その食いもんってのは？」

「ムナギじゃ。ムナギがよく効くのじゃ」

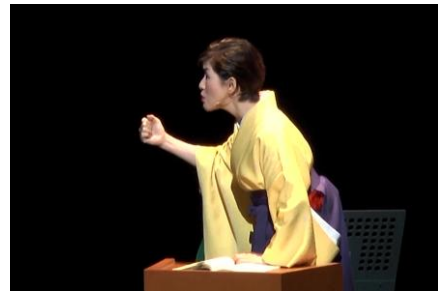
「さっきから聞いてりゃあ、ムナ毛、ムナ毛って、なんのことだい？」

「ムナゲではなくムナギ。胸の毛じゃなく、胸が黄色いからムナギ。

あのヌルヌル、ニョロニョロのムナギじゃ」(ヌルヌル、ニョロニョロ)

「ムナギ？何やらムナ騒ぎがするが……で、効くって、何にだい？」

「骨と皮に、肉がつく。そなたも晴れて、骨川肉衛門、ニク十八



ちゃんになるというものよ」

「なんと、なんと、骨川肉衛門のニク十八ちゃんに？」

「しかり、しかも肉だけではござらぬ。何より精がつく」（セ、セイ？）

「セ、セ、精がつく！ それでは、やはり、色男、ヤキモチさんだか、カネモチさんだか、そのムナギとやらを食ってるから……女子を…ム、ム、ム」（ム、ム、ム）

「イヤ、イヤ、イワ麻呂さんに物申す。夏痩せに、良しというものぞ、ムナギ捕りめせ、じゃ」（ガクッ！）

「なんじゃ、夏痩せか。で、そのムナギ野郎はどこにいるってか？」

「川じゃ、すぐそこの川にもおるようじゃ」

「隣の川に……よし、がってんだ！」（ガッテン、ガッテン）

石麻呂さん、早速、川へ直行だ。身支度ととのえ、家を飛び出し一目散、近くの川へ走りだす。（タッタタッタ）

「善は急げだ、ヤカモチさん、いんや、カネモチさん！ 行ってくるぜ。お前さんの分もとっ捕まえて、今夜はムナギの宴としようぜ」

その姿を見て、カネモチさん、いや、家持さん、はたと気がついた。「待たれよ！ ヤワちゃん、しばし待たれ！」（マタレ！）

「止めてくれるな、カネモチさん。行かねばならぬ、行かねばならぬ」

「イヤ、イヤ、行っちゃあならぬ」（イクナ！）

「なんでだ？」

「やっぱり、ヤワちゃんは、元のまんまのイワちゃんてイイ」

「なんだよ、さっき言ったこととアベコベじゃねえかよ」（アベコベ）

「そんなヤワなヤセた身体では、イワちゃんよ、川に入ってムナギ捕るまえに…」（トルマエニ）

「ムナギ捕るまえに…なんだって言うんだよ？」

「流れに足を捕られて、ムナギ捕りがムナギになっちゃう！」（ビ、ビ、ビ〜ン）

「何が何やら、ムナ騒ぎが、ムナギ騒ぎになっちゃった」（ガ〜ン）

痩す瘦すも 生ければあらむを はたやはた

鰻を取ると 川に流るな

